

ギシ・・・ギシギシ・・・

「お願いします・・・この縄を解いてください！誰にも言いませんからッ！」

早苗は両手吊りに縛られながらも震えながら男子たちを説得しようとする・・・

「フフフ・・・解くわけないだろ！俺達がどれだけお前のデカパイに迷惑してると思ってるんだよ！」

「そうだ！そんないやらしい身体しやがって・・・少しぐらい遊ばせろよ！」

「そ、そんな・・・好きでこんな身体になっただんじや・・・」

「うるせー！そんな身体に生まれただけで罪なんだよ！」

「どうやらちょっとお仕置きが必要みたいだな・・・どうしやるのさ？」

「お願いします・・・許してくださいッ！」

男子たちは謝る早苗を無視してどう責めるか相談を始める・・・

「まずは、このデカパイは揉みまくろうぜ！」

「おっしや！ずっと触つてみたかったんだよな！」

「お願いッやめてエエエ！！いやあああああ——ッ！！」

ムニユ・・・ムニユムニユ・・・モミモミ・・・

「おおーッ！！すげエ柔らかけえええ——！！」

「おっばいつてそんなに柔らかくて気持ちいいんだなア〜制服の上からでもこの感触——！！」

モミモミ・・・ムニユムニユ・・・

「んあッ・・・やめて・・・あッ・・・」

「なんだよこいつーおっばい揉まれて感じてるぜ！」

「何だかんだ言つて気持ちいいんじゃないか！ほらほらもっと揉んで欲しいんだろ？」

ぐに・・・ぐにぐにッ・・・

「いやああッ！！痛い痛いッ！！そんなに強く握らないで——！！」

「何が痛いだ！ホントは気持ちいいんだろ？オラオラッ！！」

男子たちにおっばいを強引に揉みしたかれオモチャにされるも、それで気持ち良くなって感じこじまっている

自分にさらに恥ずかしくなる早苗・・・

ぐにぐに・・・グニユ・・・グニユグニユ・・・

「ふぎイイイ！ー気持ちいいッ気持ちいいですーおっばい気持ちいいですーッー！」

「おうおう、そうかそれじゃあこの制服の上からでもくつきり分かる」チ」チになった乳首をっ！」

がッ...

モミッ

モミッ

モミッ

ぐにイイツ・・・

今度は制服の上からでもクッキリ分かる乳首に手を伸ばしグリグリと抓ったり引っ張りはじめ。。

「ひぎゃああー！ち、乳首抓らないでー！ツッ！」

「そうかそんなに乳首がいいのか！ならもっと扱いてやるよ！」

グニグニ・・・グニイイツ！！

「痛い痛いツッ！乳首とれちゃうよー！ツッ！」

がフッ

モミッ

モミッ

乳首へと押し付ける・・・

「おい今度はこいつを使おうぜ！」

「な、なんですかそれ・・・!?」

「ん？知らないのか？ただの電マだよ！普通に電気屋で売ってるだろ？」

と、男子たちは二本の電マを持ちスイッチを入れそれを早苗の

モミッ



ヴヴヴヴヴィーン・・・

「嫌アッ！そんなの乳首になんてあてたらッ！！」

「あてたらなんだ？気持ち良くなるのがそんなに嬉しいのか？」

「ほらほら、たとと味わえ！」

ヴヴヴヴヴィーン・・・ヴヴヴヴヴィーン・・・

「いやあああああッ！ッ！ッ！あふッ・・・あッ・・・だ、ダメッ！！」

「おいしい、乳首に電マあてられてホントに感じちやつてるぞこの女！」

「やっぱり変態だったか、こんなデカパイしてんだからまア当然か」

「はああん！んあッ・・・お、お願いッ！止めてくださいッ！」

「おっぱいがおかしくなっていますッ！！」

「感じてくせに何が止めてくれた、この変態女ッ！」

「よし、もっとえげつないお仕置きしてやるよ！次は尻で遊ぼうか！」

「え・・・ッ!？」

がッ...  
ヴヴヴヴ...

ヴヴヴヴ...



「お、お願いします。見ないでください！」

「これが早苗さんのおまんこかア、汚い肛門も丸見えだよ！」

「いやアア！そんなこと言わないでくださいイイ！」

「恥ずかしいイイ。もう許してほぎよおおーッ！？」

ズボボーッ！

早苗は突然何かを尻穴に押し込まれ奇声を上げる・・・

「痛い痛いッなな、何ですかーッ！？お尻に何を入れたんですかーッ！？？」

とつてー取ってくださいーッ！

「何を入れたかって？今入れたのは空気を抜いた状態のサッカーボールだよ！」

「さ、サッカーボール？なぜそんなものをお尻に・・・！？」

「そしてこれがそのサッカーボールに空気を入れるコンプレッサーだよ！」

「ま、まさか。そんなツヤめてください！そんなことしたらお尻が破裂しちゃいますッ！」

「大丈夫、大丈夫ー早苗さんの肛門は丈夫だからこれくらい問題ないよ！」

「じゃあさっそくスイッチオンっ！」

シュ……………

男子たちは早苗の尻穴にサッカーボールを押し込み、それに繋いだコンプレッサーを起動させる…。サッカーボールと言っても二回り小さいものだが、それでもバレーボール程の大きさはあるだろうか…。

「いやあああああッッッ……入ってくる!? 空気がお尻に入ってくる……!」

「おお、入って入って!」

「お願い止めてエ……お尻が破裂しちゃう……!」

「何言ってるんだ! まだ膨らみきつてないだろ! サッカーボールが膨らみきるまで我慢しろ!」

「いやあああああ……無理ッ無理です……お尻がああ……!」

肛門の中でサッカーボールが徐々に膨らむにつれ悶絶する早苗……

とうとう肛門の中のサッカーボールも完全に膨らみきつてもう丸々肛門にサッカーボールが入ってる状態になってしまった……。ミシミシと音を立てて今にも裂けそうな肛門を見て楽しげに喜ぶ男子たち……



「見るよ、もうサッカーボールで肛門がパンパンだぜ！」

「これサッカーボールが丸々入ってるんだぜ・・・よく肛門裂けないな。」

「うぎィィィッ！ーぐるしい。・肛門裂けちゃっッ！」

うぎ。・出させてくださいーも、もう肛門が限界ィィィ！」

「せつがく入れたのにもう出したいのか？」

「そうですっ！ーもう限界なんですっ！ー！便意すこいー！出す出すっ！ー！出す出すっ！ー！出す出すっ！ー！出す出すっ！ー！」

早苗は直腸に丸々サッカーボールが収まりその圧迫感と極度の便意で悶絶しながらも男子たちに出してくれと必死にお願いするが・・・



キーンコーンカーンコーン……

「お、もう朝礼の時間か？」

「じゃあサッカーボール取り出すのは放課後にしようか！」

「へっ……？い、いやああああああ……無理無理ッ絶対無理イイ……！」

「こんなの絶対耐えられないです……無理無理ッ今出させてください……！」

「おい……そんなわがまま言うとなら……出させてやんね……！」

「今日の放課後まで我慢できたら……褒美に出させてやるよ……！」

「そ、そんなアア……ふざしい……！」

「じゃあ、ほら縛解いてやるから教室行くぞ……！」







そして早苗は、肛門にサッカーボールを丸々収めたまま教室へ連れて行かれた・・・  
その後、授業中も極度の圧迫感と便秘に耐えながら必死に授業を終えていく早苗・・・  
お昼にはお弁当に下剤を入られたり大量の水を飲まれたりと、お腹もタバコの水のパンパンで  
腹痛に便秘も増しさらに極限状況にされるもなんとか耐え、ようやく放課後になり開放されると思つた早苗だったが・・・  
「ふぎいいいいーッッッ！もう限界なんですー！早く早くサッカーボール取ってえええー！！」  
「それなだけどさ・入れたはいけど俺ら取り出し方までは考えてなくってさw」  
「ッ！？ひぎイッ！？じゃッじゃあどうやって取り出せば！？ずつとこのままなんですかッ！？」  
「よく考えてみるよ、お前が頑張つて排泄すればいい話だろ？」  
「ふぎイイ・こんなに大きな無理ですよおおー！！」  
「いや、女なんだから出産の練習だと思えばできるだろ？」  
「ほら、出したらだろ？早く排泄しろよ！でないとずつとこのままだぜ？」  
「そ、そんなア・・・」  
早苗は自力で排泄できないと分かりつつも男子たちの無理な要求に応えるしかなかった・・・  
既に一日中、苦痛と便秘に苦しみもう体力もない状態で必死にサッカーボールを排泄しようとする・・・  
しかし、いくら力んでも肛門とサッカーボールとの大きさが明らかに違いすぎてサッカーボールは  
びくともしない・・・肛門も今広がってる状態が既に限界でこれ以上広がったら括約筋がダメになってしまう・・・  
「ふごおおおおッ！お・ッ・お・ッ・う・ぎいいい・・・！！」  
「おいどうした、まだ出せないのか？」  
「はア・・・はア・・・あ、あの・・・いくら力を入れても出せなくて・・・」  
「仕方ねエな・・・俺らが取つてやるよ」  
「その代わり、俺達に頼つた分お仕置きだからな！」  
「うぎ・・・わ、分かりましたッ！だから早く取ってくださいお願いしますーッッ！」  
と、男子たちはそう言つて簡単に空気を抜きサッカーボールを取り出してくれた・・・  
シューーーーー・・・ジュポポッ！！  
「ひぎイッ！？そんな一気に引き抜いたらッ！」  
「おいバカ！我慢しろ！」  
ズポポポーーーーッ！！  
「ふぎいいいいいいーッ！？？」  
お昼に飲まれた大量の水と下剤効果でお腹に溜まつた排泄物が一気に吹き出しそうになつた瞬間、  
男子たちは排泄を防ぐため近くにあつたカラーコーンに早苗の肛門に突刺しなんとか排泄を防ぐことに成功した・・・  
「ふう・・・あつぷねエ・・・もうすぐで糞塗れになるとこだったぜ・・・」  
「この糞女！ふざけやがつてー！！」  
「ふぎいいッ！排泄させてー！！！！」  
「コノヤロウ・・・まだそんなことを・・・全然反省できてねエみたいだな！」  
「このままカラーコーンに突き刺されたまま朝まで反省しろ！」  
「ふぎいいッ！ごめんなさい！ごめんなさいッ！だからそれだけはー！！」

男子たちは早苗をそのままカラーコーンに突刺しさらにガムテープでギッチギチに拘束し、  
肛門だけでカラーコーンに座ってる状態にした・・・足も着くこともできずただジタバタするその光景は  
まさに無様の極み・・・

「おい見ろよ、こいつカラーコーンに肛門だけで座ってるぜw」  
「あははw脚をジタバタさせてホント無様だなw」



「ほんじゃまア、後は明日の朝まで楽しんでくれーいや、しっかり反省してらよー」

「むっ！ーッッ！ー（待ってくださいー！置いてかないでーッッ！）」

バタン・・・

・・・

男子たちはバタンと体育倉庫の扉を閉め本当に早苗を置き去りにし帰っていった．．．  
足も着けず肛門だけでカラーコーンに座ってる状態での放置．．．

さらに、朝からのサッカーボール拡張で精神も疲労も限界．．．未だに夕ポタバのお腹に  
残ってる排泄物で便意も極限状況のまま．．．そんな状態で朝まで耐えるなんてまず不可能だろう．．．

早苗は死んでしまうかもしれないという恐怖感と苦痛にただただ耐えるしかなかった．．．  
「むぐ．．．（本当に置いてかれた．．．どうしよう．．．このままだと本当に死んでしまう．．．

こんな状態で朝までなんて耐えられるわけない．．．むぐ．．．苦しい．．．  
もう苦しすぎて頭がおかしくなっちゃう．．．だ、誰か助けて！お願い誰かー！！」

いくら助けを呼ぼうにも口が塞がれているため声も出せず、身体もガムテープでグルグル巻きに拘束されてて  
身動きもとれない．．．なんとか解こうとジタバタすると自分の体重でさらにカラーコーンが肛門にめり込んで、

肛門がさらに拡張され裂けそうなる．．．その痛みに耐えるためにもじっとして居るしかない．．．  
シーンと静まり返る放課後の体育倉庫．．．この体育倉庫は古いため今では使われておらず、そのため  
部活の生徒すら来ることはない．．．



早苗は目隠しもされているため、何も見えず聞こえず飲食も排泄も眠ることすら何も出来ずにただカラーコーンに  
刺さったまま恐怖に耐え痛みを耐え．．．ただひたすらに朝が来るのも待たなければならぬ．．．

「ふぐう．．．むぐぐ．．．」  
「（ぐるしいイ．．．誰かア．．．誰かア．．．つてもう誰も残ってないよね．．．  
こんな古い体育倉庫なんて見回りの先生すら来ないよ．．．  
もうこのまま本当に朝まで耐えなきゃいけないんだ．．．うぎイ．．．  
ギユルギユル．．．ギユルギユル．．．

「（うぎイイツ！！またお腹が暴れてきたッ．．．もう限界ッ！！  
出す！出すッ！うんち出すううううううううッ！！ふぎよおおおおおー！！

お．．．おッ．．．おッ．．．もう．．．はごオオ．．．ふぐ．．．うぐ．．．  
はア．．．はア．．．も．．．もうダメ．．．体力が．．．保たないよオ．．．

あ、あとのくらい耐えれば．．．はア．．．はア．．．今．．．何時．．．どれくらい経つの．．．

ズブズブツ メリメリツ!!

「むぐらうーッ!?」

「(ふぎイイーッ!? 肛門がああああああーッ!! 痛い痛いーッ!! あぎヤッはぎヤッ!! ああはぎやああーッ!! ま、まさか・私・ちよとつカラコーンにめり込んでるのッ!? いや・嫌あああーッ!! 刺さつてく刺さつてく!! 誰かーッ!!)」

早苗はこのままだといずれ貫通しちやうって死んじゃうと思い、必死に力んで抜けだそうとする・・・  
ズブズブーッ!!

「むごおおおーッ!!」

しかし、力んだのが逆効果でさらに早苗の身体はカラコーンに沈んでいく・・・

「(あぎやあああーッ!! ダメダメダメーッ!!)」

もう肛門がああああーッ!! 沈んでくツ私の身体がどんどんカラコーンに沈んでつちやうよー!!」  
藻掻けば藻掻くほど早苗の身体はカラコーンに沈んでいき、限界と思われた肛門もまたさらに広がっていく・・・  
当然その沈んだ分、カラコーンの先端は早苗の腸・内臓を突き、いつ貫通するのかと早苗をさらに絶望と恐怖のどん底へと突き落とす・・・

「(ひぎいいいいーッ!! 死んじゃううう!! 死んじゃうよおおおーッ!!」

誰かーッ

誰か・・・

誰か・・・

チュンチュン・・・チュンチュン・・・  
ガラガラ・・・

「おはよー早苗さん！ちゃんと反省してたかーい？」

「(・・・)」

「おおー！すげーwwカラーコーンがもうこんなに入り込んでるよー！！」

「すごい拡張力だな・・・夜の内にこんなに沈むなんて・・・」

「ほんと、早苗さんの肛門ってどうなってるんだよ・・・」

「おーい早苗さん？生きてるか？」

「むぐう・・・」

「おーおー、生きてたか！じゃあもう反省もしてることだし

早苗さんももう限界だろ？今解いてやるからな！」

「あ、排泄はその庭でいいよな？」

「飯も持ってきたから排泄終わったら食わせてやんよw」

「あと、もう今日はお疲れみただし早苗さんは授業サボって寝てることだよ！！  
早苗さんがぐっすり寝れるようスリープサックも持ってきたから！！」



ギチ。。。ギチギチ。。。

「ふぎぎ。。。お願いしますもう許してください!!。。。ここから下ろしてええ。。。お尻。。。お尻が痛いんです!!」

「ここはもう使われていない旧シャワー室。。。そこには今日も男子たちからイジメを受ける早苗がいた。。。」

「早苗はスク水姿にされ両腕両足をガムテープでグルグル巻きに拘束されており、さらに床に脚が着かない状態のまま古びた配管?に肛門だけで座らされていた。。。」

「下ろすわけないだろ!!これからお仕置き始めるんだからよ!!」

「今日も徹底的にお仕置きしてやるから覚悟しとけよw」

「ふぎぎ。。。お願い。。。もう酷いことしないで。。。ッ!!」

「まーたそんなこと言って。。。まだ調教が足りないみたいだな?」

「どうなんだ?言う通りにしないとさらに酷いことしちゃうけどいいの?」

「うぎぎ。。。言う通りに。。。します。。。ぐすん」

「早苗は抵抗も出来ずにただ男子たちの言う通りにするしかなかった。。。」

「どうせ聞こうが聞きまいが酷いことされるのには変わらなかったが、男子たちを怒らせてまた酷いことをされてしまう。。。」



「よし、ほんじゃ今日のお仕置き始めるか!!」

「で、早苗さん?このお尻の配管はどこに通じてると思う?」

「え。。。?」

「この配管の先にある貯水タンクにはね、水じゃなくこの学校の男子たち全員が協力して集めた濃厚精液が溜めてるんだよ?」

「貯水タンクの中には水ではなく学校中の男子たちが溜めに溜めた大量の濃厚精液が入ってるという。。。」

「その貯水タンクの配管が今まさに早苗の尻穴に繋がれてるという。。。」

「早苗はすぐに次に何をされるのかが分かり、一瞬で顔が青ざめてしまった。。。」

「ひィッ。。。せ、精液ッ!?!」

「もう何されるか分かったよねw そうだよ、今回のお仕置きは大量精液浣腸だよ!!」

「いやアア!!もう浣腸はいやアアッ!!」

「ああん?何だっってえ?嫌なのかア?」

「うぎ。。。い。。。いいえ。。。お、お願いします。。。」

「そうだ、それでいいんだよ!!このメス豚がッ!お前は黙ってお仕置き受けてればいいんだよ!!」

「そんじゃ流し込むぞ!!しっかり飲み干せよ!!」

キュツ。キュツ。

ゴブゴブ。ゴゴゴゴ。

男子たちは精液が大量に入ってる貯水タンクのバルブを開ける。そして学校中の男子たちの精液が早苗の尻穴へ大量に流れ込み始めた。

「ふいイイツ!?入ってくるッ!!精液がお尻の中にッ!!」

「どうだ美味しいか?まだまだあるからじゃんじゃん飲んでくれ!!」

「お、美味しいです。精液美味しいですッ!!」

ゴブゴブ。

「おうおうとんどんお腹も膨らんでくるぜ!!」

ギョルギョル。

大量の精液を注がれ早苗のお腹が風船みたいに見る見るうちに膨らみ始める。

「あア。あん。くる。苦しい。あ。あの。もうお腹いっぱいです!!」

「ああん?この間の流腸じゃもつと入っただろ?どうなんだまだ全然お腹も膨らんでないだろ?」

「うぎぎ。ですが。お腹が苦しくて。もう止めてください!!」

「まだだ!せっかく学校中の男子たちが集めてくれたんだ!しっかり飲み干せ!!」

ギョルギョル。ギョルギョル。

男子たちはそのまま精液を流し込むのを止めず、早苗のお腹が膨れていくのを楽しげに眺めてるだけで何もしない。早苗は止まることのない精液をただひたすら尻穴で飲み続け、お腹ももう限界まで膨れてしまっていた。

「もう無理だから!入らない入らないから!!」

「おい!黙って飲めないのか!!まだまだ入るだろ頑張れ!!」

「ふごおおお!!もうやめて!お腹破裂しちゃうよ!!」

「大丈夫!大丈夫!早苗さんは丈夫だから破裂なんてしないから!!」

「ほらほらお腹もこんなに膨れてるのにまだ膨らんでいくよ!!」



「ほごおおおおお!!! もう無理!!! 無理ッッ!!! お腹が破裂しちゃう!!!  
便秘すこい!!! 便秘すこい!!! もう出す!!! もう出す!!! ううううう!!!」

「ダメだよ! 排泄しちゃ!!! つかでできないけどねw」

「そろそろ口から逆流しちゃうだろ?」

「早苗さん! 逆流しちゃうになっても絶対に吐いちゃダメだからね! そんなことしたらただじゃおかないから!」

「逆流ッ!? 無理無理!!! 逆流するまでなんて入らないいい!!! 入らないから止めてえええ!!!」  
既にお腹も限界で破裂寸前状態なのに精液はさらに注ぎ込まれ、パンパンになったお腹が血管をミシミシを鳴らし始め  
本当に今にも破裂が逆流してしまいそうな勢いで膨らみ続ける。。。早苗はその破裂と逆流への恐怖と極度の便秘と腹痛に苦痛悶絶絶叫し泣き叫び続ける。。。

ゴブゴブ・・・ゴブゴブ・・・

「ほごおおお!!! 来る!!! 来る!!! 精液口から出ちゃうううう!!!」

「ほら叫んでないで口閉じて!!! 出しちゃダメだからね!!!」

「そんなの無理!!! 吐いちゃ・・・ウブッ!!!??」

「お? 口まで精液がきたみたいだぞ?」

「ほっぺ膨らまして必死に吐くの我慢してるぜww 無様だなこれww」

「む!!! なんだア? 吐きたいのか? でもダメだぞ吐いちゃ!!!」  
「むぐうううう!!!」  
等々口まで来てしまった精液を必死に吐くの我慢する早苗。。。  
まるで力エルみたい頬をふくら膨らませ必死に耐える。。。  
しかしその分さらにお腹に精液が溜まっていきパンパンに膨れたお腹がさらに膨れ上がる。。。





ギユルギユル・・・ギユルギユル・・・

「ほら！早苗さんが吐くの我慢してるからその分お腹がどんどん膨らんでいってるぜ！」

「こりやまだまだ破裂なんてしないなw」

「むぐうううううーッ！？」

「おい！！こいつ鼻から精液出してんぞ！！」

「おわア・・・鼻から精液出すとかやばいなこいつwwてか呼吸とか大丈夫か？」

「んんッ！！うんッ！！」



ブホ..

「そろそろ早苗さんも限界そうだな・・・」  
「ほら頑張れ早苗さん！まだ行けるまだ行ける！！吐いちゃダメだよ！」



ギョルギョル・・・ギョルギョル・・・

「むぐううううー……ッッ……!?!?おこごこおええええええーッッ!!」

ドバドバドバドバアア!!!

早苗は等々耐え切れず白目を剥きながら大量の精液を鼻を穴から口からと一気に吐き出した・・・

「うわア!!等々吐いちまったぜ!!もつたいね!!!」

「さすがに限界だったろうけど、我慢出来なかったからなこれはまたお仕置き追加だな・・・」

「おぼおぼおおオ・・・おえ・・・おえ・・・!!!」

ズボズボ

キッ

キユ・キユ・

男子たちは精液が勿体無いからとバルブを閉める・

これでやっと浣腸責めが終わりドバドバ吐いてた精液も治まってきた・

「おえ・おえ・」

「大丈夫か早苗さん？」

「はア・はア・げほッげほッ・だ、大丈夫・です・」

「おおそうかwさすが早苗さん！」

「お・お願ひします・げほ・と、トイレに行かせてえ・」

「ん？そんなのダメだよ！早苗さん精液吐いちゃったじゃん！そのお仕置きに今日はこのまま朝まで放置ね！」

「ッ！！？む・無理ですッ・はア・はア・もうお腹が限界なんですッ！！」

「あれ？言う通りにするんじゃなかったの？じゃあ俺達に嘘ついたってことかな？」

「ふぎぎ・お、お願ひします！・排泄させてくださいッ！！」

「分かった分かった排泄させてやんよ！」

「ッ！！？ああ、有り難うございますッ！！」

まさかの答えに驚き、排泄できるという喜びに少しホッとした表情を浮かべる早苗・

「じゃあこれから街中で早苗さんの公開排泄ショーと行きますか！」

「ふいいッ！！？い、嫌アア！そんなところで排泄なんてできませんーん！！」

「ああん？排泄したいんじゃないのか？するなら公開排泄、しないなら朝まで我慢、どっちかにしろ！」

「ふいい・そ、そんなアア・」

「どうなんだ？早く決めるよ！」

「うぐぐ・このまま・朝まで我慢させてください・お願ひします・うぐぐ・」

「そうだ、それでいいんだよ！最初から素直にそう言えばいいんだ！いいな、すっかり反省してない排泄させないからな！」

「は・はい・反省してます・うぎぎ・はア・はア・」

「それじゃまた明日ねwお疲れさま〜！」

早苗は結局排泄のチャンスと諦め、そのまま破裂寸前のお腹のまま朝まで我慢することを選んだ・

その後早苗は極度の便秘と腹痛に耐えようやく朝がやってきたが・

男子たちは我慢したご褒美にと早苗をそのまま街中へ連れて行き、結局公開排泄ショーは実行されたのであった・

ザッフリ...

「むぐ...んん...」  
ギチギチ...

「むぐッ!? むぐううううう... ツッ!? (ひぎイイ! な、なんなのッ!? くるしいイイッ!)」  
「ん? おや、目が覚めたみたいだね早苗ちゃん! 突然だけど君を拉致させてもらったよw  
今から僕の実験に付き合ってもらうからこれからよろしくね!」  
「ここは何処かの研究所... 早苗は学校帰りにスタンガンで気絶させられこの謎の博士に拉致されて来たらしい...  
気が付くと顔には黒フックにバルーンギャグ、全身をスリーブサック? とベルトでカッチリ台に固定されてて  
全く身動きがされない状態だった...」

「むぐッ!? むぐうううう... ツッ! (ふぎイイッ! な、何言ってるの!? ?じ、実験ッ?)  
くるしいイイ... くるしい... 全然動けない!? これを解いてください... ツッ!」

「今、君は僕特製のスリーブサックとベルトで完全に拘束されてるからねw  
「今、君は僕特製のスリーブサックとベルトで完全に拘束されてるからねw  
でも安心してね、早苗ちゃんを殺す気なんてないし実験って言っても早苗ちゃんはすつとそのまま  
動かずに寝てるだけだから、ゆっくり寛いでくれていいからね!」

「早苗の身体はその空気圧によりキュウキュウに圧迫されるまで大蛇に締付けられるような状態だった...  
完全に拘束され指一本、微動だにすらない状態に逃げられずも状況も理解できないまままたた深揺くことしかできなかった...」

「そんな訳の分かんない実験になんて付き合うなんてッお願いだからお家に帰して...!!  
うぎぎ... ふぎッ! アラギイイ... お尻に何か入ってるッ!? な、何? 圧迫されて肛門が尿道があああ? ?  
くるしいイイ... くるしいイイ取って取って...! 早く取って... ツッ!」

「あ、それに食事や排泄なんかも心配しなくていいからね! 尿道と肛門には注入と排出可能なバルーンで  
固定されてあった栄養は直接腸に注入するし、排泄もすっかり管理してるから何も心配することはないよ!  
あと、早苗ちゃんが寝るだけで退屈しないように子宮の中にも小型のバイポールを沢山入れておいたから  
きつと楽しめるよw」

「嫌ああッ! そんなの嫌ああ...! 早く取ってください! これを外してええ...!!」  
「そんなに嬉しいのかw喜んでもらえて僕も嬉しいよ!

「むぐううううう...! むぐううううう... ツッ! むぐううううう... ツッ!」

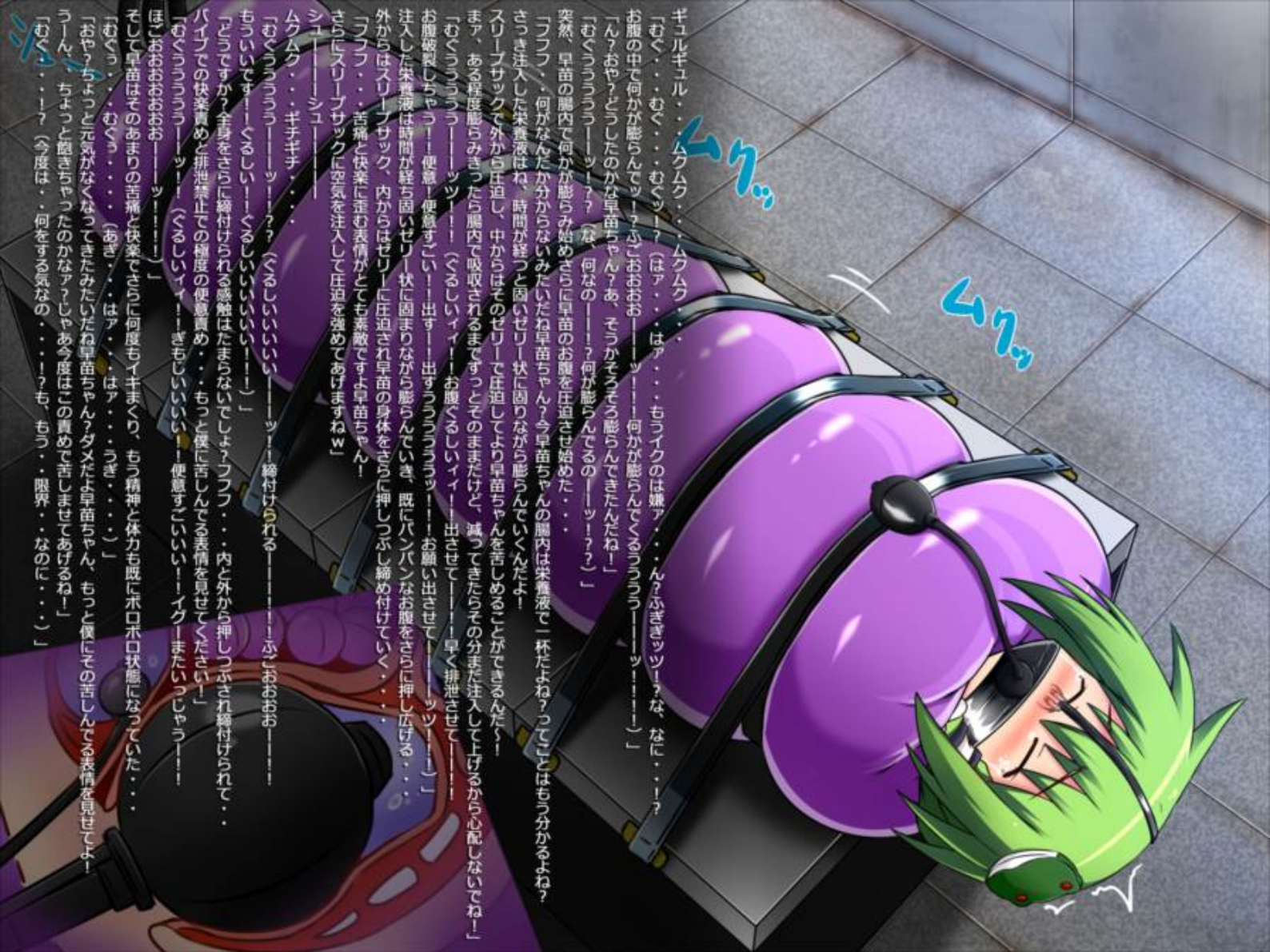
「嫌ああッ! そんなの嫌ああ...! 早く取ってください! これを外してええ...!!」

「そんなに嬉しいのかw喜んでもらえて僕も嬉しいよ!

「むぐううううう...! むぐううううう... ツッ! むぐううううう... ツッ!」

「嫌ああッ! そんなの嫌ああ...! 早く取ってください! これを外してええ...!!」





ギョルギョル...ムクムク...ムクムク

「むく...むく...むく...むく...はア...はア...もつイクのは嫌ア...ん？ふききッ？なに...なに...お腹の中で何かが膨らんでッ？ふおおおお...何が膨らんでくるウラウラ...ッ...」

「ん？おや？どうしたのかな早苗ちゃん？あ、そうかそそでる膨らんで来たんだね！」

「むく...ッ...？なに、何なの...？何が膨らんでるの...ッ...？」

突然、早苗の腕内で何かが膨らみ始めさらに早苗のお腹を圧迫させ始めた...  
「フッフ、何がなんだか分からないみたいだね早苗ちゃん？今早苗ちゃんの腕内は栄養液で一杯だよ...ってことはもっ分かるよね？さっき注入した栄養液はね、時間が経つと固いゼリー状に固まりながら膨らんでいくんだよ。」

スリーブサックで外から圧迫し、中からはそのゼリーで圧迫してより早苗ちゃんを苦しめることができるんだ...  
「まア、ある程度膨らみきつたら腕内で吸収されるまでですとそのままだけど、減ってきたらその分また注入して上げるから心配しないでね！」

「むく...ッ...ッ...お腹くるしい...出して...早く排泄させて...お腹破れちゃう...！便秘！便秘すこい...出す...出す...お願い出させて...ッ...」

注入した栄養液は時間が経ち固いゼリー状に固まりながら膨らんでいき、既にパンパンなお腹をさらに押し広げる...  
「外からはスリーブサック、内からはゼリーで圧迫され早苗の身体をさらに押しつぶし締め付けていく...」

「フッフ...苦痛と快楽に走む表情がとてモ素敵ですよ早苗ちゃん！  
さらにスリーブサックに空気を注入して圧迫を強めてあげますねw」

「ムクムク...ギチギチ...  
「むく...ッ...」

「どうですか？全身をさらに締め付けられる感覚はたまらないでしょ？フッフ...内と外から押しつぶされ締め付けられて、  
ハイプでの快楽賣めと排泄禁止との極度の便秘賣め...もっと僕に苦しんでる表情を見せてください！」

「むく...ッ...」

「ほ...おおおおお...ッ...」

「おや？ちょっと元気がなくなってきたみたいだね早苗ちゃん？ダメだよ早苗ちゃん、もっと僕にその苦しんでる表情を見せてよ！  
うん、ちょっと飽きちゃったのかなア？じゃあ今度はこの賣めで苦しませてあげるね！」

「むく...ッ...」

「むく...ッ...」





【それから数時間】

早苗はあれから長時間にわたり、スリープサックと洗腸液での締付け責め・バイブボムでの快楽責め・臭いガスでの臭い責めを受け続け精神と体力の限界を超え失神し、すぐに苦痛で目が覚めを繰り返していた……

「むふ……むふ……（た、誰か……た、助けて……）」

「そろそろ臭いにも飽きてきた頃ですかね？次はもう寝る時間なので寒くないようにこの部屋をサウナにしておきますね！スリープサックの下は汗で覆冷えないようにしっかりとヒーターで巻いてあるので心配しないでくださいw

では部屋の温度を100度に設定してっと！100度のサウナは血行の改善や老廃物、疲労物の排泄を促し美容効果にもなるんですよ！

それじゃあ僕はそろそろ寝ますんで、早苗ちゃんもゆっくり休んでくださいー  
また明日よろしくね早苗ちゃんwおやすみなさいー！

「むふ……むふ……！！（いや……まって……はア……はア……置いてかないでくださいー！）」

「むふ……むふ……！！（いや……まって……はア……はア……置いてかないでくださいー！）」

「むふ……むふ……！！（いや……まって……はア……はア……置いてかないでくださいー！）」

「むふ……むふ……！！（いや……まって……はア……はア……置いてかないでくださいー！）」



チーン  
チーン



【そして翌日】

早苗はあれからずっとスリープサックの中で意識を失い続け、スリープサックと違ってまあ状態はゆっくり休めるはずもなく朝まで苦しみも悶えていた……

「フッフ……おはよう早苗ちゃん！昨日はゆっくり眠れたかい？今日も僕の実験の続きをするからよろしくね！」

「むふ……むふ……お、お願い……します……もう……本当に……限界……し、死んじゃいます……」

「それじゃあまずは朝ご飯からしますか！さすがに触覚部に栄養液を注入しても胃袋にも何は入れておかないとね！」

「むく……？（朝）飯……？やった……やっとこの口を外せてもらえる……」



ニユルニユル...

「ほーら早苗ちゃん朝ご飯のミスですすよー」

「ッー??み、ミススーッー??い、嫌ーッー??近づけないでーッー!!気持ち悪いですー!!」

「ほーら鼻から食べるんだよー」

「嫌ーッー??鼻の中にミス入らないでーッー!!ジュリユルルッー??むふッー??げほッー??げほッー!!」

「おーおーすごいすごい早苗ちゃん！ミリスを素直みたいに一気に吸ったよー！余程お腹が空いてたんだねw





この調子で二匹目もいってみよう！ほーら！まだまだじゃんじゃんいるからとんとん食べてよ！」  
「嫌……………ミズ嫌……………呼吸が鼻からしかできないせいで一氣に嘔つちゃうー！気持ち悪い気持ち悪い！！  
もうやめて……………鼻からミズなんて食べたくな……………」  
そして早苗は朝ご飯にバケツ一杯のミズを鼻から食べ続け胃袋はすぐにミズでパンパンになった……………  
それから早苗はスリプサックと食事排泄管理をされたまま謎の実験を続ける日々を過ごすのであった……………  
一ヶ月……………一年……………いや、これからずっと……………死ぬまで……………

「ふらふら……」

「ふらふら……」

「よし、そろそろ戻らないと昼休み終わっちゃうー!」

「ふらふら……」

「ん?」

「ひぎひぎ……」

「ひぎひぎ……」

「ひぎひぎ……」

「ひぎひぎ……」

「ひぎひぎ……」

「ひぎひぎ……」

「ひぎひぎ……」

「ひぎひぎ……」

「ひぎひぎ……」

「ひぎひぎ……」

「ひぎひぎ……」

「ひぎひぎ……」

「ひぎひぎ……」

「ひぎひぎ……」

「ひぎひぎ……」

「ひぎひぎ……」

「ひぎひぎ……」

「ひぎひぎ……」

「ひぎひぎ……」

「ひぎひぎ……」

「ひぎひぎ……」

「ひぎひぎ……」

「ひぎひぎ……」

「ひぎひぎ……」

「ひぎひぎ……」

「ひぎひぎ……」

「ひぎひぎ……」

「ひぎひぎ……」

「ひぎひぎ……」

「ひぎひぎ……」

「ひぎひぎ……」

「ひぎひぎ……」

「ひぎひぎ……」

「ひぎひぎ……」



ズチユズチユ。。。

ポコ。。ポコポコ。。。

「うぎッ!? 何か中に入って。。。? やだッ何か産み付けられてるみたいな。。。まさか触手の卵。。。!?」

ポコポコ。。ポコポコ。。。

「いぎぎッ!? ポコポコ入ってくるうう!! 嫌ああッ卵産み付けないでえええ!!!」

お腹破裂しちゃうううう!!!

そんな嫌がる早苗をよそに触手はどんどん卵を植え付けていく。。。尻穴と膣にデニスボール程の大きさの卵が次々と送られていきお腹がポコポコと膨らんでいく。。。

「うぎぎぎイー!!! 苦しいイイ。。。お腹が卵でどんどん膨れてくるうう。。。!!! もう無理ッ入らない入らないから!!!」

ポコポコ。。ポコポコ。。。

「おごごごおえええええ!!! お腹が破裂しちゃううううッ!!!」

早苗のお腹はすでに破裂寸前まで膨れ上がり大量の卵で満たされていた。。。お腹の表面がポコポコと不気味に卵が浮かび上がっている。。。

ニユルニユル。。。

「おごオ。。。うぐ。。。はア。。。はア。。。お、終わった。。。の。。。?」

触手は産卵を終えたのか便器からいなくなっていた。。。産卵が終わりやっとその場から逃げるようになってきたが、ギッシリ詰め込まれた卵の重さでうまく立ち上がることができない。。。それにこんなお腹の状態で外になつて出れないし、

恥ずかしくて助けも呼べない。。。

「うぐぐぐ。。。と、とにかくこの卵を排泄しなくちゃ。。。うぐッ。。。ううう。。。」

ムリムリ。。。

「うぐぐぐ。。。うう。。。はア。。。はア。。。はア。。。で、出ない。。。ど、どうしよう。。。卵が大きすぎていくら力んでも出てきてくれない。。。」

早苗はとにかく産み付けられた卵を排泄しようとするが、あまりの大きさにいくら力んでも卵が詰まって排泄できない。。。

キーンコーンカーンコーン。。。

と、その時チャイムがなり昼休みが終わってしまった。。。

「ああア。。。お昼休み終わっちゃった。。。早く戻らないと誰か探しに来ちゃう。。。こんな姿見られたら私。。。

でも、いくら力んでも出せないし。。。とにかく見つからないところへ行かなきゃ。。。!!!」

。。。。



早苗は卵がギッシリ詰まったお腹を抱えてなんとかトイレの外まで出るもあまりの重さにすぐに倒れてしまふ・・・  
「うきぎッ・・・お腹が重すぎて歩けないイ！ダメええ・・・立てないイ・・・このままじゃ誰か来ちゃうよ・・・  
早苗は四つん這いになりながら重いお腹を引きずって廊下を進む・・・ガッ」  
ガヤガヤ・・・  
「エッ！？誰か来ちゃったッ！？どっしろう！？隠れる場所はッ！？」  
隠れ用にも上手く立てない・・・そうしてる間にクラスの男子たちが・・・  
「あれ？東風谷じゃね？どうしたんだ？お前もサボりか？ってなんだよその腹WWW！？」  
「おいWWWまんごまで丸出しにして何やってんだWWW！？」  
早苗は授業をサボって出てきた男子たちに恥ずかしい姿を見られてしまった・・・  
「嫌アあああ！見ないでええー！見ないでくださいー！ツツ！」  
「だからどうしたんだってその腹はよ？さっきまでそんな腹じゃなかったらど？いきなり孕んだのかよ？」  
「ち、違いますッ！そんなんほごおやおおおおお！ツツ！？お腹がああああ！ツツ！？？」  
「孵化！？孵化しちゃった！？！？お腹の中で暴れないでえええええー！？」

ボネッ

ボネッ



ポコポコ・・・ポコポコ・・・

「おい、なんだ！？急に苦しみだしたぞー！」

「孵化って言ったよな？おい、腹の表面がポコポコって波打ってるぞ！何かが中で孵化したんだよ！」

「うげええ・気持ちわりイ・・・孵化って人外生物とかなんかかよ・・・」

男子たちが見ている中でさっき産み付けられたばかりの卵が急に孵化し、子触手たちがお腹の中で暴れだしていた・・・

お腹の表面が触手たちで不気味に波打ち、あまりの衝撃に悶絶し絶叫する早苗・・・

ポコポコ・・・ポコポコ・・・

「おげええええええッ！お、お腹の中で暴れないでえええ！くるしい！くるしい！くるしい！」

「おい、東風谷？苦しいなら早く産んでやれよ？それに早く俺達にもお前の子供見せてくれ！」

「おご」オオ？い、嫌アア！そんなと見せたくありませんんほごおおおおおおお！」

「そんなと云うなよ・・・お前こそそのままいいのか？」人で産めないのなら俺達が手伝ってやるのか？」

と、男子たちの前で出産するのを嫌がり苦しみ涙掻く早苗に男子たちは笑しげに声をかける・・・

「いいです！いいです！いいです！」人で産めまっすうううう！ほごおおおおおお！」

生まれる！生まれじゃう！おごごごおええええええ！」

お腹の触手たちが出口を求めて暴れ回り、出口の穴に触手たちが集中していく・・・

ムリムリ・・・ミチムチ・・・

ミチミチ・・・ミチ・・・ジューポポポ

「おごごごおええええええ！ッ・・・生まれだあああああ！ッ・・・裂けるっっっ裂けちゃっっっ！」







ギチ・・・ギチギチ・・・

「おふふふ・・・おっ・・・むぐぐぐ・・・んんっ・・・」  
「ここはある廃校舎・・・早苗は悪い男子たちに捕まりギチギチに縛られ閉じ込められていた・・・  
早苗はギチギチに緊縛され全く身動きがとれないで落撞いている・・・さらに、乳首は紐で縛られ、床に釘で固定されて  
駆けまわることできない・・・股にはローターの快楽責め、肛門にはアナルバルーン拡張の便意責め・・・  
早苗はこの状態のまま数時間放置されていた・・・」

「うう・・・こんな状態でいつまで放置されてはいいの？誰か・・・誰か助けてーッー！  
あれからどれくらい経ったんだろう・・・んあッ・・・ふぎ・・・またイッちゃう・・・  
ち、ちう・・・こんな限界なのに・・・お尻の風船も大きすぎて排泄できないし・・・  
もう便意で辛すぎて死んじゃうよ・・・はア・・・はア・・・あん・・・うう・・・」



で、でも・・・こんなに醜いことされてるのに・・・苦しいはずなのに・・・なんでこんなに気持ちよく感じちゃうの・・・？  
体中ギチギチに縛られて身動き取れないのに・・・縄が良い込んで痛いはずなのに、なぜか・・・うん・・・あッあッ！  
私、こんなに変態だったの・・・ギチギチに縛らせてお尻とかに風船入れられて何時間も放置されてるのに感じちゃうって・・・  
嫌ッ・・・こんなことで感じたくないッ！イキたくない・・・も、イキたくないのに・・・は、はんッ・・・ああんッ！！  
またイッチャウッ！！

カラカラッ・・・  
「ふんッ！！？」  
「よう、東風谷持たせたな！大人しく待ってたか？」  
「ふう・・・やつと授業終わったぜエ・・・これでやつと東風谷で楽しめるな！」  
「昼休みからずっと放置だったけど、大丈夫だったよな？お前は早速したことになるから安心しろ！」  
男子たちは午後の授業が終わわり、早苗を聞き込めて居る廃校舎へやってきた・・・  
「むくッ！？」  
「おお、元気そうだな？退屈しなきゃオモチャは気持ちよかったですか？」  
「待たせた分、あとはじっくり遊んでやるよ！」  
「むふふ・・・ッ！むくくくくくくくくくく・・・ッ・・・」  
「まア待て待て、ちよっと縛り直すからよ！」



【敵分後】

「ふっ…こんなもんでいいかな？」

ギチ…ギチギチ…

そこには、新たに縛り直され胡座縛りで吊るされてる早苗がいた…

「ふぎぎ…お願いします…もう、こんなことやめてください…誰にも言いませんから…お願いします…」

「は？やめるわけないだろ？俺たちが何か悪いことでもしてるのか？」

「え…だって、こんな酷いこと…」

「は？酷いことしてるのはお前の方だろ？」

「え…？」

「お前、俺達が普段とんだけお前のムチムチ工口ホディ魅せつけられて我慢してると思ってた？」

「そ、そんなの知りませんよ！いいから縄を解いてくださいー！」

「こりゃダメだ…ちょっと調教しないとだ…このままじゃ使い物にならね…」

「ひっ…調教…？？い、嫌…お願い…許してくださいー！」

「うるせー！このメス豚が！自分の立場を覚えてやるよー！」

「いやあああああ……ッ……ッ……ッ……」

そして男子たちは、嫌がる早苗を強引に襲い始める……

男子たちは一斉に自分たちのズボンを下ろし、その固くキンキンに勃起した肉棒を早苗に向ける……

「いやあああああ……ッ……ッ……ッ……」

「おいおい、そんなものって酷いこと言うなア……」

「お前さんの大好きなちゃんぽだろ？」

「そ、そんなもの好きじゃありません……早く閉まってください……ッ……」

「まア、遠慮すんなって！ほら、お前のまんこもヒクヒクいやらしい汁出してるじゃねーか！」

「そ、そんなもの出てません！いいから閉まってください……」

「じゃあ早速、東風谷の処女賣っせー！」

「おいおい、お前が先かよ！俺も東風谷の処女まんこ使いてえよ！」

「あん？別にいいたろ？これからずっ使い放題なんだからよー？」

「っ、使い放題ってッ？誰がそんなことをッ！絶対、許しませんよ……」

「うーん、まアそうだな……じゃあ俺アナル処女賣うな！」

「ははッ お前アナルがよ……って東風谷待たせてるから！えと、この穴か？」



グイグイ……

「いやあああああ……ッ……ッ……ッ……待って待ってッ……お願いします……本当にやめてください……ッ……」

「だから、うるせんだよ……ッ……さっさと黙りやがれ……」

ズ……ズボボボオオ……ッ……ッ……」

「ひぎひぎ……ッ……ッ……ッ……ッ……ッ……ッ……ッ……ッ……ッ……ッ……」

「お……お……入った入った！やつは処女だからキツイな……」

「あ……あ……ッ……ッ……やめてって言ったのに……ッ……ッ……」

「何言ってるんだ？これが欲しかったくせに！ホレホレ……」

ジューブジューブ……パンパンッ……パンパンッ……」

「ひッ……や、嫌あああ……ッ……動かないで……ッ……抜いて！抜いてええ……ッ……あ……あ……ッ……い、いきッ……あはんッ……」

ズボン



「お前さん……最高だぜ……東風谷の中すげー気持ち良いわ……」  
「いやあああ……ッ……あッあッあああ……ぬいで……ッ……ちんぽ抜いてええ……ッ……あッはぎッ……あきや……」  
「東風谷気持ち良いぞ……お前さんの穴最高だ……ッ……お前も俺のちんぽ啜えて気持ち良いだろ……?」  
「気持ちよくないでうら……ッ……だから早く抜いて……ッ……あッあッ……いぎッ……ああん……」  
「は？ふざけんな……俺のちんぽ使つておいて気持ち良くないだ……?」  
「おい？お前だけすりよ……早く俺らにも変われ……ッ……」  
「なんだよ、まだ中出ししてね……んだから待てや……ッ……このいるさいメス豚の上の口があるだろ？うるさいからそっち塞げよ……」

お前さん

パキッ  
パキッ

ギキッ  
ギキッ



「お？言われてみれば、上の口もあったな・・・じゃあ俺が上の口塞いでやるぜー！」  
「え・ッ！ま、待つて上の口の口つてまさかッ？あんッあんッ！待つてッ！やめてー！！！」

おかしな話

ど

ロロロロ

ギギッ

ムヒッ







【数分後】

キーーンンンンンンンンンンンンンンンンンンンンンン

「あが・・・あ・・・あ・・・」

「ふう・・・もう下校時間かア・・・？大分スツキリしたぜー今日はこの辺にして明日にするかー？」

「そっだな・・・俺もちと出しすぎて疲れたし・・・」

「そんじや東風谷！俺たち今日はもう帰るから、また明日よろしくなー！あとほゆるり休んでくれー！」



「あ・・・え・・・ツィ？ちよつと！！このままにして行くんですかーッ！！マッ  
あのー！縄解いて行ってくださいいいー！！！！置いてかないでー！！！！ッッ！！！！」

ガラガラ・・・バタンッ！

【二週間後】

早苗は、その後も男子たちの肉便器にされ続け、お腹は男子たちの精液でパンパンに膨れ上がり、穴という穴がガバガバになるまで使われてしまったていた……

「むぐ……むぐ……」  
「ギチギチ……ギチギチ……」

んぐ……

「今日は東風谷の穴も大分使い込んでガバガバになったし、感謝を込めて掃除してやんよ！」

「肉便器もしっかり掃除してやんないとな……使うこっちが困るし」

「にしても、こうして見ると本当にガバガバだよ……奥まで丸見えだよ……」

「アナルなんて、何もなくても開きっぱなしだぜ……？東風谷の括約筋どうしたよ？」

「これじゃ、ずっとウン」垂れ流しのオムツ生活決定だな……」

「うぐう……ぐすん……ぐすん……」

グッ  
グッ  
グッ

ギチッ  
ギチッ



「まア、東風谷泣くなつて！俺達がしつかり面倒見てやるからよ！」  
と、いい男子たちはトイレ掃除用の便所ブラシを取り出す……

「むぐッ!?」

「やっぱ便所掃除と言ったらこれだろ？そのガバガバの穴をゴシゴシ綺麗に磨いてやるよ！」

「むぐぐぐぐうううう……ッ……!??む……ッ……む……ッ……」

「じゃあまずは尻穴からっ」と！」

ズボボボオオ……ッ……!

「むぐぐぐぐうううう……ッ……!??!?」

シヨリシヨリ……「シ」シ……

「むぐぐぐぐうううう……ッ……!」

もがが……ッ……!もがッ……!むぐむむむ……ッ……!」

「奥の奥まで綺麗にしてやるからな……うっしうっしと！」

「てか、肛門に便所ブラシ突っ込まれるとか……東風谷お前完全に便器だな！ハハハッ！」

「無様だなー東風谷！そんなお前には、おまんこにも便所ブラシ突っ込んでやるよ！」

ジュボボボオオ……ッ……!」

「むぐぐぐうううう……ッ……!??」

「尻穴も膣もしつかり磨いてやるよ……!」

シヨリシヨリ……「シ」シ……「シ」シ……「シ」シ……

「奥まで突っ込んで子宮も綺麗に掃除しないと」と！」

「赤っちゃんの部屋なんだから綺麗にしとかないとな……うっしうっしと！」

「むぐぐぐぐうううう……ッ……!もがッ……もががが……ッ……!」





ギシッ・・・ギシッ・・・

「お願いします・・・誰にも言いませんからこの縄を解いてくださいッ！」

と、そこにはギチギチに緊縛されてる早苗の姿があった・・・

「ここは人気のない廃校舎・・・早苗はクラスの男子たちに捕まりイジメを受けていた・・・

「誰が助けるか！お前さんが悪いんだぞ！そんなデカパイしやがって・・・」

「そうだ、俺達男子がそのいやらしいデカパイにどれだけ迷惑してると思ってるんだ！」

と、男子たちは早苗に怒鳴りつける・・・

「そ、そんな・・・好きでこんな身体になつたわけじゃありません！」

お願いですから、ここから出してくださいッ！」

「まだ自分の罪が分かってないようだな・・・これは徹底的にお仕置きするしかないな！」

「お前はそんな身体に生まれた以上、俺達男子の肉便器になるのが義務なんだよ！」

男子たちはそう言い強引にお仕置きを始めた...

「嫌ッ！やめてくださいッ！なにをする気ですかッ！！」

「まずはこの特大アナルバルーンをねじ込んでやる」

ズボオオッ！！

「ひ、ひぎイッ！？痛い痛い！抜いてくださいーッ！！」

男子たちはカバンから取り出したアナルバルーンをいきなり早苗の肛門へとねじ込んだ・・・

大型のアナルバルーンが一気にズボボポッと音を立て直腸へと入っていく・・・まだ空気を入れてない状態でも

極太なのでそれなりに痛みもあるようだ・・・

「何が痛いだ！ホントはこれから何されるか楽しみなくせに、淫乱のメス豚は黙って待ってる！」

「ふぎぎ・・・お願い許してエエ・・・！」

「フフフ・・・根本までしっかりと飲み込んだぜ！いきなりこんな極太のアナルバルーンもすんなり入るとか

ホント変態アナルしてるんだな早苗さんは〜！」

「ふぎぎー！そんなこと言わないでくださいイイッ！！本当に痛いんです！肛門が裂けちゃいますー！！！」

「まだ裂けやしないだろ？本当に裂けるのはこれなんだからな・・・それじゃ早速空気を入れてやるよ！」

シュコ・・・シュコ・・・





ズチユ・

今度は別なアナルバルーンを膣に突っ込む・・・

「!?ももうダメ!!!本当にお腹破裂しちゃう!!!」

「ええい!うるさい女だ黙って我慢してろ!」

シユコ・・・シユコ・・・

「うおおおおおなかー!ツツ!!膣の中で膨らんでくるー!ツツ!!」

「今度は子宮をパンパンにしてやるよ!まずはしっかりバルーンを膨らませてっ!」

「ふぎぎ・・・ツツ!!膣が苦しいイイ・・・苦しいですう・・・もう膨らませないでくださいイイ!!」

「フッフ・・・これだけ拡張されたら出産するときも楽に産めるんじゃないか?」

「嫌アア!!やめてください!!これ以上膨らませないでエエー!ツツ!!ふぎぎイイ!!」

「よし、バルーンはこんなもんでいいか?それじゃあ子宮にも注入っ!」

早苗は尻穴に続き子宮にも注がれ続け、早苗の平だったお腹が浣腸液で見る見るうちに膨らんでいく・・・  
浣腸液がどんどん注がれていくがバルーンで栓をされてるせいで排泄もできない・・・  
バルーン拡張の時点ですでに極度の便秘状態だったのが、そこから大量浣腸されたせいで便秘がさらに極限状態になり早苗の精神がどんどん限界に近づいて行く・・・





「最後は膀胱だ！」

コブコブ・・・コブコブ・・・

男子たちは最後に膀胱へと注入を始めた・・・

「うおおおん！？ダメダメ！もう限界なの！！お腹破裂する！！便意すごいもう出す出すーッ！！」

「いい加減にしろ！黙って我慢できないのかこのメス豚め！！俺たちがいいと言つまで黙って我慢できないならもつと入れるぞ！それそれ！」

コブコブ・・・コブコブ・・・

「あああやめてー！！我慢します！我慢しますだからもう入れないでー！！」

「本当に分かったのか？それそれ！」

「うおおお本当です！ご主人様たちがいいと言つまで我慢します！させてくださいーッ！！」

「よし、それなら俺らがいいと言つまで我慢し続けてろよ！」

「は・・・はい・・・ふぎぎ・・・」

早苗は三穴バルーン拡張され破裂寸前の浣腸ポテのまま排泄もさせてもらえず  
極度の便意の中ただひたすら悶え耐え続ける・・・

シコシコ・・・

「ふぎぎ・・・な、何をする気ですかッ・・・！！？はア・・・はア・・・？」

「頑張ってる早苗さんに僕らからちよつとしたご褒美だよ！」

「アアア・・・出るッ！！ほら受け取って僕らの精液をッ！！」

「い、嫌アアッ！！やめッ！！？」

ガクッ

ガクッ

ゲゲッ

ミチッ

ミチッ

フポッ



ビュルルル...ドビュ...ドビュ...

「八八八ッ精液塗れになってこれでちよつとはマシになったかなw前よか可愛いぜ早苗さんww  
男子たちに精液をぶっかけられ、頭から全身まで精液塗れになってしまった」

「嫌ア...汚いイ...精液でベトベトするよオオ...」

早苗は無意識に本音を喋ってしまった...  
「ああん?おい、俺らの精液が汚いつてか!?せつかくのご褒美なのに...やっぱりもつと調教が必要みたいだな...」  
「ひいッ!?ごめんないッごめんないッ!!有り難うございます!!とつても嬉しいですッ!!」

「もうおせーよバカ女がッ!!!」  
早苗はまたしても男子たちを怒らせてしまい、ただでさえ便意と苦痛で限界だというのにさらに調教という言葉聞いてしまい  
背筋が凍りつく...

ネチッ...

ガッガッ...  
チッ

チッ

ガッ



〔そして数分後〕

ギチギチ・・・ギチギチ・・・

早苗は破裂寸前のお腹はそのまま、さらにおっぱいだけで吊り下げられていた・・・脚は地面につかないように縛られており、アナルバルーンには抜けないことをいいことに重石が括りつけられていた・・・

「あぎゃあああああーッッッ!!??おっぱいが干切れるッおっぱいが干切れちゃうーッッッ!!!!痛い痛い痛いいいいいーッッ!!下ろしてでええええええーッッ!!下ろしてくださいいいいッ!!」

「干切れるわけねーだろ!少しは静かにできねーのかよ!」

「八八八ッ元気だねエ早苗さんw こんなことされてるのにまだそんな元気があるとか変態なのかな?」

「ふぎぎッ!!ち、違いますー!!お願いしますもう許してくださいイビッ!!」

早苗は乳吊りされたまま暴れだす・・・そのせいで余計に縄が食い込みさらにおっぱいが締付けられることに・・・

「ふぎぎぎいいいー!!おっぱいが締付けられるううううーッ!!」

「おいおい、暴れると余計食い込んでしまうぜ?」

「さて、早苗さんのお仕置きを始めますか!」

「お、お願いします・・・許して・・・何する気なんですか・・・?」

早苗は恐る恐る次の責め方を聞く・・・

ギョルルル...

ギョルル...

「悪い子の早苗さんにはお仕置きに人間サンドバッグになってもらおうよ！」

「ひ、ひィイツ!? 嫌ア・・・こ、怖い・・・やめてくだsッおごこッツ!??」

ボゴオオオオーッ  
ギョルギョル・・・ギョルギョル・・・

男子はいきなり許しを請う早苗のポテ腹に向かって腹パンをした・・・  
「何度も言わせんな!! 許すわけもねーし黙ってお仕置きされてろ!! オラッオラッ」

そう言って男子たちは早苗のポテ腹に何発ものパンチを入れる・・・  
ボゴオオオオオ・・・  
ボゴオオオオオ・・・

「ほごッ!! おがッ!! おげエエッ!! やめッ・・・ほごおおおおおッ!!」  
「オラッどうした!! しっかり反省してんのか? もっと殴ってくださいとか言えねーのか!!」  
と、男子たちは無茶な要求をし何も悪いことしてない早苗のお腹を殴り続ける・・・  
「おがッ・・・も・・・もっど・・・おごこッ!!」  
「オラッ!! 何言っつつか全然分かんねーぞ!!」





そして乳吊りされたまま人間サンドバッグとして殴られ続けたパンパンのポテ腹は痛々しい程に痣だらけになっていた。  
「ふう……これだけじゃ全然反省しねーな……次の責めにいくか？」  
と言い男子たちは殴るのを止め、何やら電極のようなものを早苗の乳首へと取り付ける……  
「あ……あ……がは……はア……はア……はア……?」  
「いつまで寝てんだよ!これでしっかり目覚ませ!!」

ギョッ!!

ブルッ

ギョッ!!

ギョッ!!

バチバチバチッ!!!

「いぎやあああああああ———ッッッ!!!??あがッ……???.はア…….はア…….何で……すか……??」

いきなり早苗を電流が襲う…….はやりさつき男子たちが取り付けたのは電極だったらしい…….

「お前んらいの変態女になるとこんなこんな高圧電流をくらっても気持ちいいんだろ?」

「どうなんだ?気持ちいいのか?気持ちいいよな?」

男子たちは無理矢理気持ちいいと言わせようとする…….そしてそれを分かっても早苗には恐怖で逆らうことができない…….

「ふぎぎ…….ぎ…….きも…….気持ちいい…….です…….ぐす…….」

「おうそうか!じゃあどんどん電圧上げていくから気持ちいいと言いつけるよ?」

「ひいッ!!!??」

バチバチバチ…….

「あぎやあああああ———ッッッ!!!いぎやあああああああ———ッッッ!!!」

男子たちは容赦なく電圧を上げていく…….





バチバチバチッ！！！！

「……あ……あ……あぎやああああー！！！！？」

「やった！蘇生したぞ！」

「おい、早苗！お前なに勝手に死んでんだよ！！！」

「????はア……はア……ずみません……??？」

早苗は意識が戻ったはいがまだ電流の影響で混乱してるようだ……

早苗のおっぱいからはあまりの電流を受け続けて痛々しく皮膚は焦げそこから湯気まで立ち上っている……

「今日はこの辺で許してやるか……？」

「どうだ早苗？しつかり反省はできたか？」

「はア……はア……あが……は、はい……反省……できました……」

早苗はやっとこの苦痛から開放されるとホッとする……

「おうそうか、じゃあ反省できてるなら明日までこのままでも余裕だよな？」

「へッ!?そ……それだけは……!!!」

ホッとしたのもつかの間……男子たちはとんでもないことを口にした……

「やっぱり反省できたってのは嘘か……じゃあまた明日もお仕置きだな」

「今日はこのまま朝までしつかり反省してろよ！明日の朝の反応しだいで許してやるか決めてやる！」

「ほんじゃ俺ら帰るからしつかり反省してるんだぞ！それじゃあな〜早苗〜！」

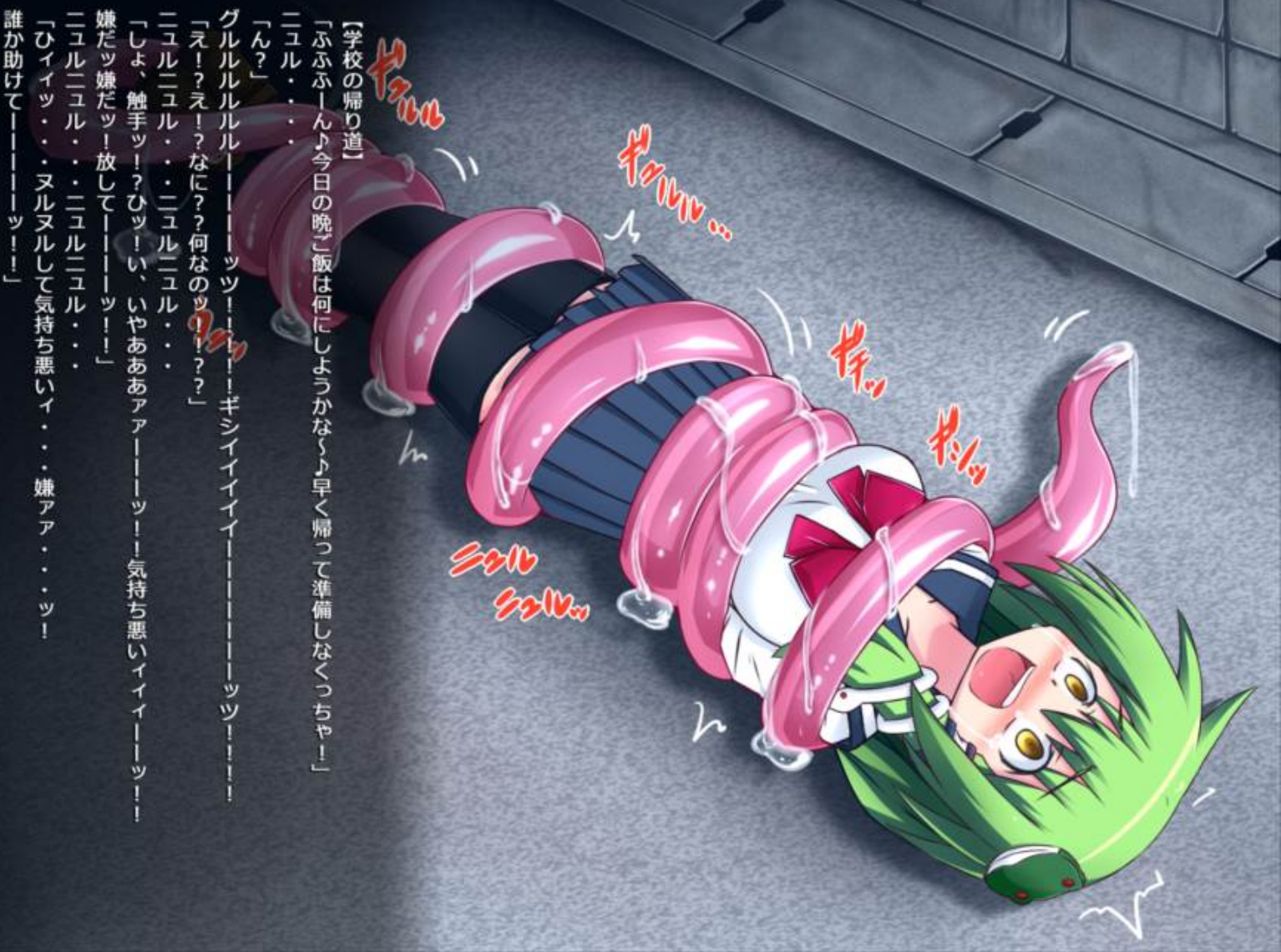
「ま、待ってください!!!置いてかないでー!!!下ろしてってください!!!」

そして早苗は無残な姿のままその場に放置された……乳吊り、破裂寸前ボテ、排泄禁止……

この極度の苦痛に朝まで耐えなければならぬ……

そして耐えたとしても朝にはまた理不尽なお仕置きが始まるのであろう……  
そう思いながら早苗の孤独と絶望の長い夜が始まった……





【学校の帰り道】

「ふふふーん♪今日の晩ご飯は何にしようかな〜♪早く帰って準備しなくっちゃ！」

ニユル……

「ん？」

グルルルルルル……ツツ……！……ギシイイイイ……ツツ……！……

「え！？え！？なに？？何なのツツ……！？」

ニユルニユル……ニユルニユル……

「しょ、触手ツツ？ひツツ！いやああアア……ツツ……！気持ち悪いイイイ……！

嫌だッ嫌だッ……放して……ツツ……！」

ニユルニユル……ニユルニユル……

「ひイイツ……ヌルヌルして気持ち悪いイ……嫌アア……ツツ！

誰か助けて……ツツ……！」

突然マンホールから触手が出てきて、そこを通りかかった早苗に襲いかかる……  
まるで獲物を通りかかるとの待ち伏せしてたかのように、一気に全身に巻き付き放そうとしない……  
ギチギチ……ギチギチ……

「はぎやあッー!!!痛いッ!痛いッ!締付けられるッー!!!痛いよやめてッー!!!」  
早苗はそのまま地面に倒れ込み、逃げようと藻掻くが触手は放そうとしない……  
それどころか全身が見えなくなるまで巻き付けてきて、さらに締付けが強くなっていく……

「あがッ!あがッ!あ……ぐあ……や、やめて……苦しいッー!!!」  
ギチギチ……ミツミツ……

「ぐあああッー!!!締付けがす、すこしいッー!!!」  
「こ、こんなのに締付けられたら……し、死んじゃうよッー!!!」  
ギチギチ……ニユルニユル……

「ぐッ……はア……はア……苦しい……もう全然動けない……」  
お願い……誰か助けてよッー!!!」





ウニウニ・・・ジュボ・・・ジュボポポツ・・・

「へっ・・・？い、嫌ッ！ー食べないでッ！ー誰か！誰か！ーッ！ー！  
食べられちゃうッ！食べられちゃうよ！ーッ！ーッ！ーッ！ーッ！ーッ！ーッ！ーッ！ーッ！  
マンホールから触手の本体らしきワームがウニウニと顔を見せ、早苗を口へと引きすり込んでいく・・・  
ジュボポポ・・・ジュボ・・・

「いやあああーッ！ー来ないで！ーッ！ーお願いだから食べないで！ーッ！ーッ！ーッ！ーッ！ーッ！  
早苗の身体が見る見るうちに、ワームの中に引きすり込まれていく・・・  
ワームの中に入っていくにつれ締付けもさらに強くなり、骨がミシミシと軋み始める・・・  
ギチギチ・・・ミシミシ・・・

「あああああ！ーッ！ー痛！痛！痛！よ！ーッ！ー！じめつけないで！ーッ！ーッ！ーッ！  
ぐるしいい！ーッ！ー！内蔵がああ！ーッ！骨がああ！ーッ！ーッ！ーッ！ーッ！ーッ！  
ミシミシ・・・メキメキ・・・」



早苗の身体が顔だけを残し、完全にワームの中に収まってしまった……  
まるでスリーブサックがチヨココロネが地面に転がってるかようになってしまった早苗……  
ミシミシ……メキメキ……

「へおおおおあ——ッ——ぎもじい——ッ——締付けられで……ぐるぐる……」

「ほ……じい……おおお——ッ——ぎもじい……よおおお——」

早苗はあまりの締付けで、苦痛を通り越し快楽を感じ始めてきた……  
内臓を押し潰され骨を軋ませ、早苗は苦痛と快楽を感じながらマンホールの中へと引きずり込まれていく……  
メキメキ……ハキ……ボキ……

「へほほほおおお——ッ——おげッ……がはッ……骨が折られでくおおお——ッ——  
で……ほ……ぎもじい……よおおお——ッ——」



ズボッ  
ズボッ  
ズボッ

ズリズリズリ……  
「あがッ……はがッ……おえ……ち、もう無理ィ……じ、じぬっ……」  
ズリズリズリ……  
ズリズリ……  
ズリ……

道路には不気味にワームの粘液だけが残り、ワームは早苗を丸呑みながら、そのままマンホールの中へと消えてった……















ギチギチ・・・ギチギチ・・・  
「うぐぐ・・・全然動けないッ・・・ぐ、苦しいよオ・・・締付けないでエ・・・!!」  
ニユルニユル・・・ニユルニユル・・・  
「えッ・・・!? また触手がッ! ... うづてなにあれッ!? いやあああ... ツ食べられちゃっ... ツ!!」  
早苗の足元には、触手の本体と思われる巨大なワームが口からワネワネと触手を出している・・・  
その触手は早苗の身体に巻き付いていき、さらにギチギチに締め上げていく・・・  
ギョルルルルルル・・・  
ギョルギョル・・・ギチギチ・・・ギチギチ・・・  
「ぐ、苦しい・・・もう無理イ・・・こんなに巻き付かれたら絶対逃げられないよオ・・・!!  
うぎぎ・・・食べられちゃっ・・・死にたくない・・・死にたくないよーッ!!」





バリッ……

「!?」

バリバリバリバリ……ツッ……

「はぎゃああああああ……ツッ……あががががあああ……ツッ……!」

触手はとどめを刺すかのように、電気ショックで早苗にとどめを刺す……

すでに、全身縛付けてポロポロな所へさらに電流での攻撃……早苗は今まで以上に悶絶絶叫を繰り返す……

バリバリバリバリ……

バチバチ……バチバチ……

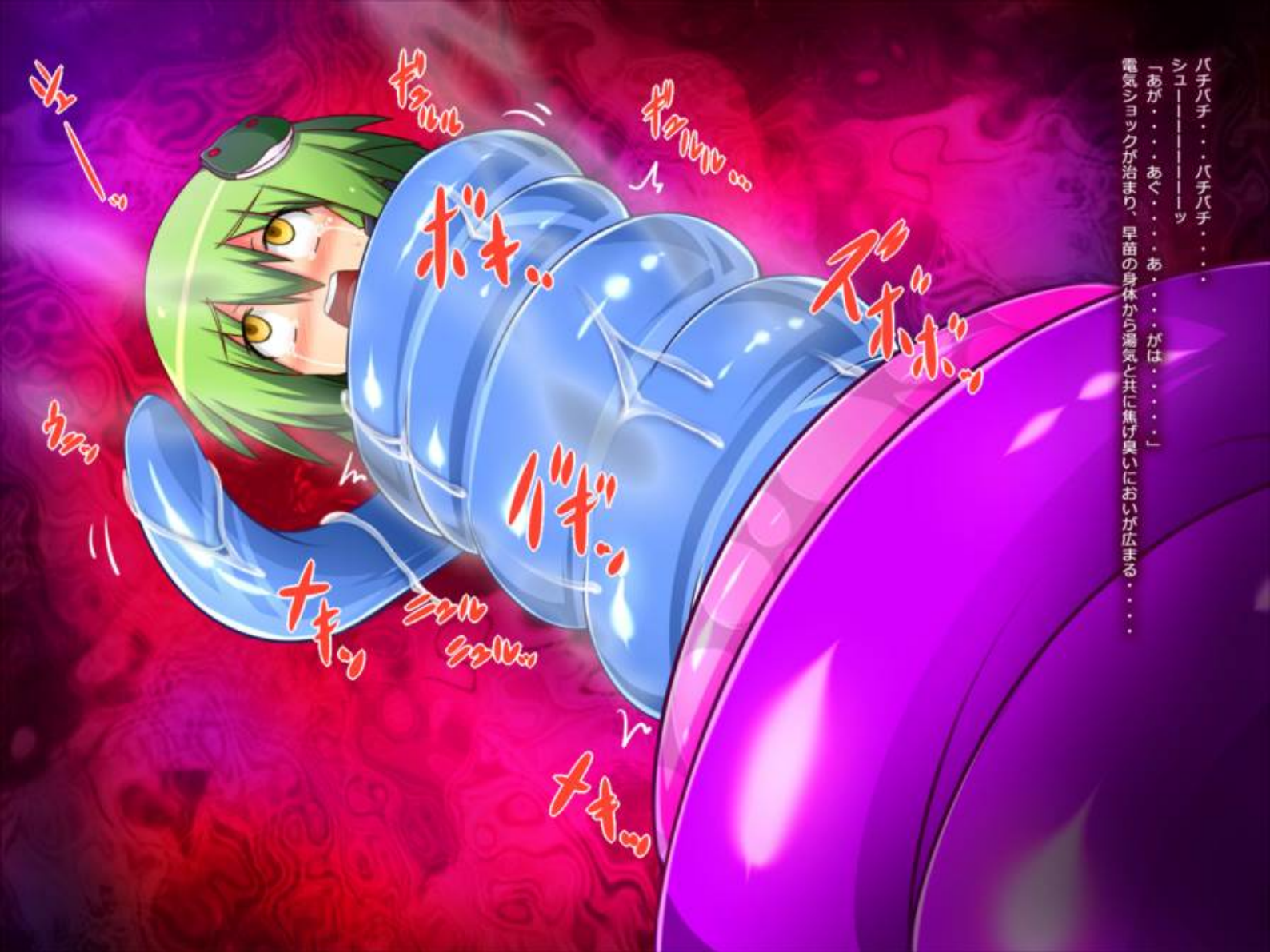
「はぎゃああああああ……ツッ……あががががあああ……ツッ……!」

「じじじ、じびれる……ツッ……電気……電気……いとおお……ツッ……!」

「いへ……ツッ……いっ……縛付けと電気責めで……お……お……お……ツッ……!」

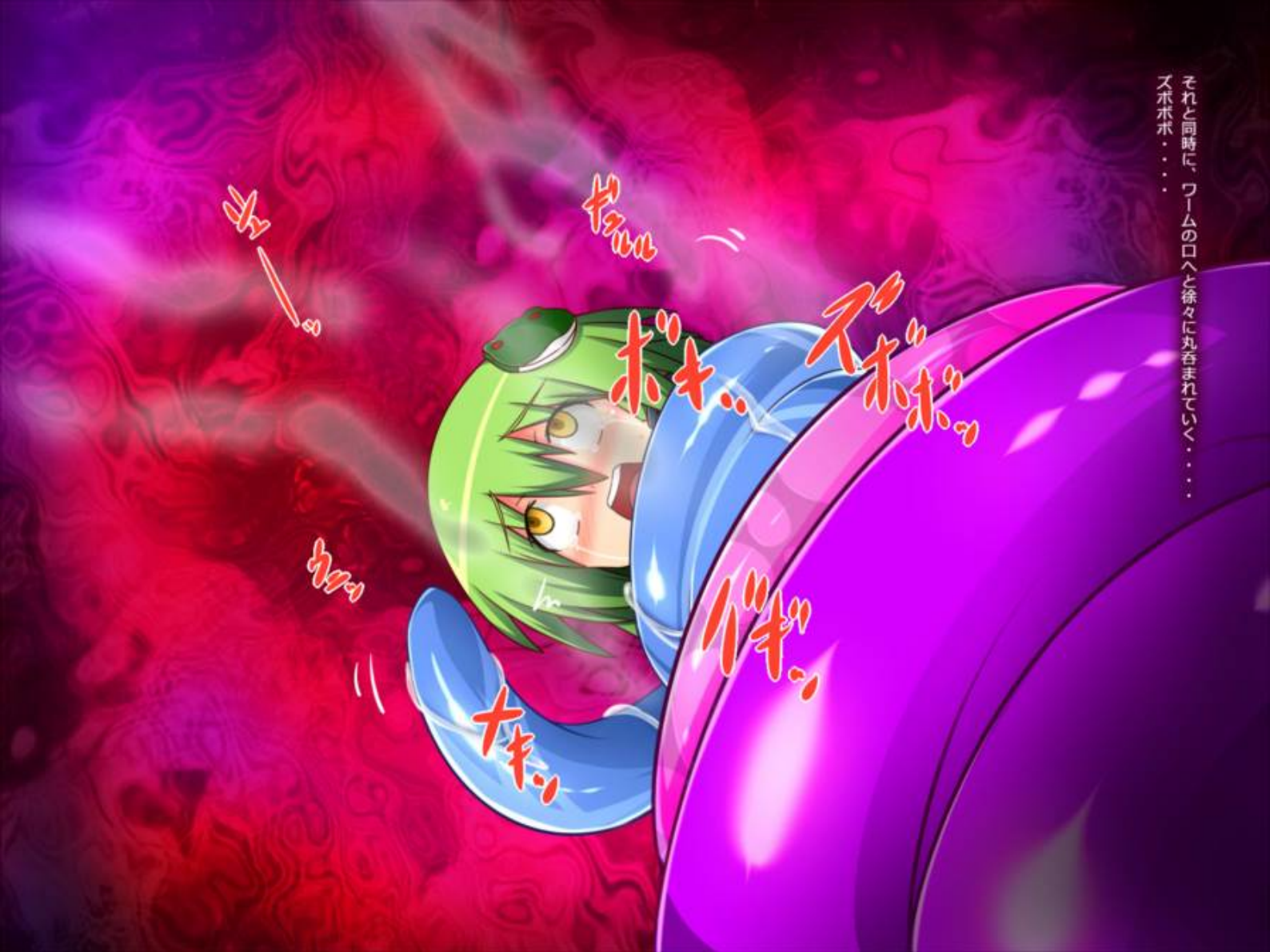
早苗は苦しむどころか電気責めが快楽責めに変貌し、さらに精神が崩壊していく……

バリバリバリバリ……



ハチハチ・・・ハチハチ・・・  
シューーーーーッ  
「あが・・・あぐ・・・あ・・・あ・・・がは・・・」  
電気ショックが治まり、早苗の身体から湯気と共に焦げ臭いにおいが広まる・・・

それと同時に、ワームの口へと徐々に丸吞まれていく……  
スポポポ……



又チユ・・・又チユ・・・  
ゲブツ・・・

早苗は矢神したまま完全にワームに丸吞まれてしまった・・・

カオ





【数分後】

ギシギシ……メキメキ……

「あ……あが……あががががあああ……ッ！……ッ！……おげッ！ぐるじいじい……ッ！」

早苗は意識を取り戻し、自分がワームに丸呑まれていることに気づく……そしてまた悶絶と絶叫を始める……

ボキボキ……メキメキ……

ギシギシ……

「あがががッ！……私……ま、まだ生きてるのッ！……いびき……痛い……苦しいイイ……こんなじゃもう助からないよね……」

メキメキメキメキ……ッ

「あががががあああ……ッ！……ッ！……痛い痛い……ッ！……ッ！……お、お願い……もう殺してええ……ッ！」

早苗は気絶したせいで快樂が一度リセットされ、また苦痛へと変わっていた……

さらに、丸呑みされてる現実を再確認され、あまりの恐怖と苦痛に自ら早く死にたいと願っていた……

「お願い……もうこんなの耐えられないのオオ……あがッ……はががあああ……ッ！」

おキッ

おキッ

おキッ

おキッ

おキッ

おキッ

おキッ

ギシギシ……メキメキ……

ニユルニユル……

「もががが……もががが……もががが……（嫌ッ……口に触手が……）」

口に触手が侵入してきて、締付けで狭くなった早苗の中をウニウニと押し広げていく……  
ニユルニユル……

もがががが……もががが……おげッ！ほげッ！おげッ！おげッ！……（触手がお腹の中に入れてくる……）  
胃が……腸が……おお……おお……おお……おお……（  
内と外からの締め付けと圧迫でさらに身体が押し潰されていく……）

おキッ

おキッ

おキッ

おキッ

おキッ

おキッ

おキッ

